

第24回 都市景観フォーラム 記録集

横須賀の景観

語ろう中央エリアのまちづくり

平成31年2月17日（日）

よこすか都市景観協議会

【第24回都市景観フォーラム記録集】

■都市景観フォーラムの概要

名 称：第24回都市景観フォーラム
テーマ：横須賀の景観 語ろう中央エリアのまちづくり
日 時：平成31年2月17日（日）
会 場：ヴェルクよこすか 6階ホール
参加者：132名

■プログラム

13：30 ●開会

主催者挨拶 小泉 厚 /よこすか都市景観協議会会長
来賓挨拶 上地 克明 /横須賀市長

13：40 ●すかまち景観デザイン賞授賞式

景観デザイン部門（大賞、協議会賞、市長特別賞 各1か所）
海が見える坂道部門（大賞1か所、協議会賞5か所）

14：15 ●講演

テーマ：地元住民による横須賀中央の活性化と景観まちづくり
神谷 裕直さん /株計画工房・横須賀中央エリアまちづくり検討会議アドバイザー

●発表

テーマ：まちづくりガイドラインを活用した継続的な「協働まちづくり」の展開
井上 拓央さん /東京大学大学院都市工学専攻

15：15 ●休憩

15：30 ●パネルディスカッション

コーディネーター：

神谷 裕直さん /講演者

パネリスト：

上田 滋 さん /大滝町会会長・横須賀中央エリアまちづくり検討会議座長

国吉 直行さん /横須賀市景観審議会委員・横浜市立大学GCIシニアアドバイザー

井上 拓央さん /発表者

小山美智恵さん /（一社）神奈川県建築士会横須賀支部・よこすか都市景観協議会

※本書は、フォーラムの内容を記録としてまとめたもので、報告書の内容は事務局の文責で編集したものです。

■会場風景



■主催者挨拶（小泉会長）



■来賓挨拶（上地市長）



■すかまち景観デザイン賞授賞式



■景観デザイン部門大賞（日本エリート®(株)）



■海が見える坂道部門大賞（高橋弘二さん）



■講演（神谷裕直さん）



■発表（井上拓央さん）



■パネルディスカッション



■パネルディスカッション



基調講演

『地域住民による横須賀中央の活性化と 景観まちづくり』

かみやひろただ
神谷裕直氏（株計画工房・横須賀中央エリアまち
づくり検討会議アドバイザー）

○神谷氏 みなさん、こんにちは。今日はお越しいただきましてありがとうございます。

今日のテーマは、「地域住民による横須賀中央の活性化と景観まちづくり」というタイトルで、主に横須賀中央エリア検討会議のアドバイザーをしていたので、そういったことから今日は講演させていただくことになりました。よろしく願いいたします。

ガイドラインの内容に入る前にどのような経緯で作成されたかについて触れたいと思います。

ガイドラインの一番大きな特徴としては、横須賀中央に住む人、つまり町内会の人。商いをする人、つまり商店会の人。利用する人、つまり市民たちで協議会を作り、足掛け4年ぐらいかかり協議会が主体となってガイドラインを作成したことです。

正直申しまして、当初は行政が作ったたたき台を参加型まちづくりと称して協議会が追認する形でスタートしようとしたのですが、自分たちの街の将来は行政頼りではなく、自分たちが考え、汗を流し、意識を高めていかなくては実現しないという強い意志のもとで、丁寧に議論を重ねて作ろうという考えで検討してきました。4年かけてようやく出来上がった経緯があります。

当然、メンバーの一人一人の立場が違うため、必ずしも利害は一致しませんが、そういう中でも良く考え議論を重ねることで一定の方向にたどり着きました。地元市民が主体となる参加型は色々ありますが、本当の意味の参加型という形でガイドラインを作成していったとお伝えしたいと思います。

今日は、主に3つ内容を説明したいと思います。

1点目は、「まちづくりガイドライン作成の経緯」です。

2点目は、「ガイドライン作成にあたっての課題や作業をしている間に得られた色々な成果」です。

3点目としては、「このガイドラインを協議会は、どのように活用していきたいと考えているのか」を説明したいと思います。

まずは、「ガイドライン作成の経緯」です。

きっかけは、横須賀中央で最初に再開発を行った、大滝町二丁目地区再開発事業、リドレが実現したことにあります。

少し背景に触れます。30年以上前、横須賀中央にダイエーができたことがきっかけに地元の商店街などが「大型店に客を取られる」という危機感がありました。それに対応するため、昭和60年に「横須賀中心市街地整備計画」が出来上がりました。これは、横須賀中央を中心に汐入から日の出町にかけて、横須賀市の中心エリア約100ha一帯を対象にした新しい都心づくりという考え方で、このエリアを「ポートタウン・ヨコスカ」と銘打ち、「都市観光の育成」、「回遊と溜りの演出」、「コミュニティ機能の導入」、「人と車の調和」これを実現していこうというものです。

この計画に基づいた、もしくは連動した形でウェルシティ横須賀や海辺ニュータウンなどが中心エリアの両サイドに連坦する形を持って、市街地として先行して整備されました。そういった流れの中で、平成15年に中央地域を対象とした市街地整備の在り方を見直しました。その時の基本コンセプトとしては、コンパクトで歩行者環境の整った、都心居住と都心都市機能が複合する中心市街地づくりを目指しました。その時の時代背景として当然議論されたこととしては、バブル崩壊や高齢化社会などの影響を受けて中央自体の拠点

性が弱まっている。元々、三浦半島の中心であったが、上大岡や横浜の方に行ってしまう、素通りしてしまう、そういったことが現実として起こっている。そういった空洞化にどうやって対応していけばよいのか。主に商業活性からの観点からの課題でした。

同様に百貨店等の大規模商業施設が中央から撤退していき、それ以外にも深刻な現象として地元の店舗が次々と外部資本のチェーン店などに取って代われ、街の力がだいぶ脆弱になってしまっている。ビルの空室も目立っていることも深刻な事象と捉えていました。

一方でその時に議論していたのは、高齢者といえども大半は元気で意欲がある人である。谷戸部から中心に移り住み、歩いて生活できる便利で快適な、能動的なライフスタイルの送れるコンパクトな都心づくりを目指しました。

具体的に実現させるための手法として再開発も重要な解決策と考えられていました。

それでは「再開発」という言葉を頭に置いて考えますと中央エリアの街区は、1街区あたり3,000㎡～4,000㎡ぐらいであり、非常に使い勝手の良い外周の整ったものになっています。

老朽化とかそういうこともあり、中央大通り沿道には6カ所で再開発の準備組合、もしくは協議会が立ち上がり、開発が検討されています。ここにはないものも、警察署跡地や田原屋の跡地の計画も出ています。

この開発がそれぞれ順調にいけばよいが、問題は早い者勝ちで自分の利益だけを追求してそれぞれがばらばらに開発を進めてしまうとどのような街になってしまうだろうということです。

リドレは、容積600%の時代に総合設計などを利用して850%の建物が建っています。先ほど、小泉会長からもお話がありましたが、中央大通り沿道は現在、

800%になっています。リドレと同じように公開空地を取って計算すると簡単に1,000%を超えてしまう。1,000%を超える開発とは、東京都心の東京都周辺や日本橋、虎ノ門とかと同様な空間になってしまう。一方、5年前のデータになってしまっていますが、現状中央エリアの容積消化率は300%に満たないです。開発ポテンシャルはいったいどこにあるのか。開発をしながら豊かな街を作っていくのは良いことだと思うが牌の取り合いをして早い者勝ちでは残されたところは非常に荒んだ街になってしまうのではないかと思います。

そんな中でトップランナーとしてリドレが平成27年11月に完成しました。

少し視点を変えます。リドレ再開発にあたっては地区計画が定められました。その時、都心型市街地環境を形成することをテーマに土地利用としては、「敷地内に歩道上空地を整備することにより、歩行者の安全性と快適性の向上を図るとともに、公共空間と一体的な都市空間の形成を図る」とあります。

建築物としては、「良好な都市景観の形成に寄与するよう意匠に留意するとともに、色彩は原色を避け、彩度を抑えた色合いのものとする」、つまり落ちついた街並みにしましょう、ということです。

もう一つは、壁面のセットバックについて。「道路境界から6mセットバックする」とか、「31m以上は10m以上セットバック」とあります。

しかし、こういうものを容積800%使うとどのような眺めになるのか。空が少ししか見えない、道路に対して高さが1:2とか1:3とか狭い空になってしまいます。そこまで開発ポテンシャルはないかもしれないですけど、法的にはこのようなことが可能になっていることを意識しないとイケません。

次は、視点を変えて考えてみようと思います。

リドレの再開発は、資料によると約156億円の投資

がされているとあります。再開発であるから、当然補助金も込みですが、いずれにしても中央エリアに約156億円の投資が行われました。

そのエリアへの貢献として、歩行者空間などを提供して街に色々な貢献をする。これが、リドレで行われたのですが、これは最初の開発であったため、次のエリアとの連担ということを意識した開発ではありませんでした。むしろ意識するもしないも「全体としてこうしていこう」という考え方が示されなければやりようがなかったかもしれません。

そういうことがあって、このような大型投資が個々で行われていくと市街地環境がバラバラになってしまいます。せっかく2番目、3番目と投資され、全体でもって非常に大きい金額が投資されたとしても、その投資効果が非常に少なくなってしまうのではないかと。

そういったことを考え併せて、先ほどの地区計画の内容を考えますとこれから起こりえることを想定して中央エリアの開発とか整備を効果的に連携して、エリア全体の価値を高めるためには、全体の指針がどうしても必要である。それをガイドラインという形にして提示しよう。それを行政がやるのではなくて、地元が作ろうというのがこのガイドラインが作られた経緯でございます。

地元のことは自分たちで考えて行動しなければならない。全体が良くなるためには、連携する必要がある。したがって、全体のガイドラインを自分たちで作ろう。これが、ガイドラインを作った時の大きな口実であります。

次にガイドラインを作るにあたって色々な課題があります。課題はありますが、色々苦労した後には、プロセスを通じて得られた色々な果実もあると思います。

1点目として、このガイドラインを作っているときの課題があります。

この点については後ほど座長を務められた大滝町の上田さんから生の声も届けていただけていると思いますが、私自身が感じたことをお伝えします。

まちづくりには価値観や立場の違う人々の多様な意見があること。理解しているけど背に腹はかえられない、そうしたくても現実にそうはできない事情をそれぞれみんな持っていること。なかなか同意が得られない。

もう一つ大きな話は、やはり当事者意識がまだ低い。誰かがやってくれるものであって、誰かがやっている後で付いていけばいいやと考える方が多い。

まだ2つばかりしか挙げていませんが、きりがいいほどの課題がありました。

しかし、最初申し上げたように非常に根気のいる大変な仕事でしたが、理解を深める手間を惜しまないで、メンバーの合意形成ができていく。こういうプロセスを通してメンバーの中にも自分の地域の将来に係ることは、自分だけではなく、自分の次の世代にも返ってくるということで、それを良しとして一肌脱ぐかというような人が継続して参加していただけたのではないかなと思っております。途中で誰も抜けませんでした。

2点目の課題としては、中央地域そのものが持っている課題があります。

先ほど申し上げたように開発可能な容量として、800%の容積率が与えられているが、現実のポテンシャルと大きなギャップがあります。では、ガイドラインでギャップを埋めるのかということ、なかなかそういうところまで踏み込みません。

それから、誰かが早い者勝ちしてしまうということについて、それをダメだということは言えない。ですから、そういうところで非常にジレンマがあります。

個人的には、このエリアの開発可能総量を全体で賢く配分することによって全体が生き残ることが考えよ

うによってはできるため、そうすれば全体が潤うのではないかと考えています。

整理しますと開発可能なポテンシャルと容積率は大きなギャップがあります。早いもの勝ちだと、それはNOとは言えないけれど、そこが非常に不安である。

それから、先行する開発のほとんどが事業の都合上、マンションばかりです。低層部に商業を入れます。しかし、どうしても商業床にそれほどポテンシャルがないから、増えない。

もう一つは、お店側の事情ですが後継者不足ということもあり、地元の店が無くなって、中央支店が入ってくる。そうすると当事者が少なくなってきて、他人事になってしまう。そういう地域の背景があるから、ガイドラインを作るにあたって、合意の部分が難しいということがあったと思います。

3点目にガイドラインを作っていく上で、技術的な悩みがありました。形態やデザインなど具体的に可視化して示さないと理解が難しいことから、事例などでわかりやすく表現したが、詳細にすればするほど自由度を失い、斬新なアイデアや開発意欲に水を差しかねないというジレンマもありました。

あと、現時点でできる議論は尽くしましたが、今後、運用を重ねる中で常により良いものに改善する必要があると考えております。当然、時代が変われば価値観や状況は変わってきます。今、正しいと考えられるものが10年後20年後にも全て正しいということはないはずです。その時その時に最善なものに修正を加えながら継続するということが必要だという風に考えています。

また、少し違った視点かもしれませんが、まちづくりの成果をどのように考えるか。短絡的に費用対効果をまちづくりにあてはめられるのであれば、あれができた、これができなかったという話になるかもしれま

せんが、まちづくりはそのような短期的なスパンではないと思いますし、常に継続していく話だと思います。ですから、そう考えると個々にあれができたという結果も重要ですが、それ以上にその時その時にベストだと思えることを誠実に積み重ねていくことがまちを継続的に更新・リノベーションしていく力になっていく。最終的に中央地区が持続的に発展していく。あまり目先のことに一喜一憂しないで、続けていくことが重要だと考えております。

最後にこのガイドラインをどのように使ってほしいかについて述べます。

お手元にガイドラインの概要版があると思います。

このガイドラインの頭のところに、「初めに」と書かれている部分があると思います。

ここにガイドラインを作ったみんなの思いが書かれています。読み上げます。

三浦半島でいちばん大きな街、横須賀中央。これから横須賀中央はさまざまな再開発や建替えが進み、新しく生まれ変わろうとしています。10年後、20年後の横須賀中央が、住んでいる人、働いている人、観光や買い物に来た人など、いろいろな人にとって「面白いな、居心地がいいな」と思える場所が増えていくように、そして誰もが「楽しい場所」を見つけることができる街を目指します。

このガイドラインは、街を空間・環境・景観の視点から見つめ、こんな横須賀中央にしたい！という想いを街のみなさんと考え、検討を重ねてきたものをまとめました。

みなさんが思い描くステキな街にしていくには、街に関わる全ての人の力が必要です。この街の景観やこれからについて一緒に考えていきましょう。このような思いで、ガイドラインを作った皆さんは取り組んでいました。

次に運用のことについてですが、運用に向けてのお願いも「ガイドラインのねらい」に書いてあります。

前半を割愛いたしますが、横須賀中央エリアが、賑やかで楽しい商店街としての魅力を最大限生かせるよう、またこの街とも違う横須賀の個性を持ったまちづくりができるよう、このエリアで市街地再開発事業や個別の建て替え等を行う際に、事業主や建築設計者、開発者等のみなさまにこのガイドラインが活用されることを願っています。

まず、横須賀中央エリアには、このような想いを込めたガイドラインがあることを知ってほしい。そしてガイドラインにのっとってどんな協力ができるかを考えてほしい。これは、事業主、建築家、開発者全てに対してです。

協議会がどのような思いで中央を育てていきたいと考えているかを感じてほしい。そして、協力者になっていただきたい。そして、みんなで中央を育ててほしい。少し青くさいかもしれませんが、そういう思いがあることを理解してほしいです。

最後に具体的な運用の話します。

来年度から具体的に運用します。詳細は、最後に書いてありますが、事務局を横須賀市都市部まちなみ景観課に置いてありますので、問い合わせは市にしてください。あくまでも事務局で、主体は協議会です。

一定規模の開発行為や建築行為、テナントの入れ替えなどに際して「横須賀中央エリアまちづくり景観協議会」とガイドラインに基づいて協議をしていただきたいということです。

まずは、事務局である市に問い合わせ、案件を協議申請書として提出いただき、協議会と協議し、協議終了後には協議会より協議済書をお渡しします。

最後に私のまとめということでお聞きください。

ガイドラインは、開発の自由を縛るのではなく、自

身の資産を守って、増やしてくれるものです。私は、海に見える真鶴に住んでいます。自分の家から海が見えるから真鶴に行きましたが、目の前にマンションが建ってしまったら、こんな所に住んでもしょうがない。しかし、そういうことがない。何故ならば、真鶴には「美の基準」というのがあって制限をされているから。私はそれを知っていたから真鶴に家を建てました。これは、個人的な話でしたけど、街の中心でも言えることだと思います。

勝手なことをやろうとする時に、ルールがあればある程度抑制される。だからルールは守っていただきたい。そのルールでやろうとしているのは、建物のデザインとかに関連するものになりますが、デザインを整えただけでは街の魅力は出てくるものではない。どうしたら、楽しく便利に豊かさを実感できるのかというのは、まちを使いこなしていくことで色々と実感してくることだと思います。

このような視点からは、地区計画で先行してリドレのところは、歩行者空間を広くして広場を作っています。その隣に連動した同じようなものができると公共空間を使って、街を使いこなそうという。これはパブリック・メイキングということで、国交省も推奨していますが、まちづくりガイドラインを運用していくことで、パブリック・メイキングに繋げることができるのではないかと考えています。

更にそれを広く運用していくことで、全体のエリアマネジメントの一環と位置付けた展開なども期待できます。最終的にはエリア全体として、地域をどういう風に盛り上げていくかという話になります。

都市空間と都市活動は表裏一体と考え、ガイドラインの運用を通して効果的な場づくりを誘導する。そこでコトを興し、街を楽しく活気づけることにより、横須賀中央の街が持続的に発展し、継続的にリノベーシ

ョンするサイクルが出来上がることを期待しています。これで私の講演はこれで終わります。

次に東京大学工学系研究科都市工学専攻クラスで、横須賀市の中心エリアを対象に「横須賀ダウンタウンプラン」という演習を行っています。そこに参加した学生である井上さんが外部の若者世代が見る横須賀中央の現状の評価、これからどうしたらいいかという提言など、発表していただけたと思いますので、井上さんに後を引き継ぎたいと思います。

以上で私の講演は終わります。

発表

『まちづくりガイドラインを活用した継続的な「協働まちづくり」の展開について』

いのうえたくお
井上拓央氏（東京大学大学院都市工学専攻）

○井上氏 ご紹介いただきました井上拓央と申します。東京大学から来ました。

今日は、約30分間のお時間をいただきました。この中でお話させていただければと思います。

今日のサブテーマは、「語ろう中央エリアのまちづくり」ということで、私一人で語ってもしようがないので、後で皆さんに語ってもらいたいと思いますので、皆さんも心の準備をお願いします。

まずは、自己紹介からさせていただきます。

1995年に長野県長野市で生まれました。現在は、東京都杉並区に住んでいます。工学系研究科都市工学専攻というところに所属しております、修士課程の1年という学年です。

普段は、都市計画というよりは人と場所の関係・関わり方の研究をしています。

では、皆さんに研究の紹介というわけではないですが、最初にやっていただきたいことがあります。いきなりですが、今から皆さんにとって大切な場所を3か

所、頭の中で思い描いていただきたいと思います。30秒くらいで考えてください。どんな場所でも結構です。

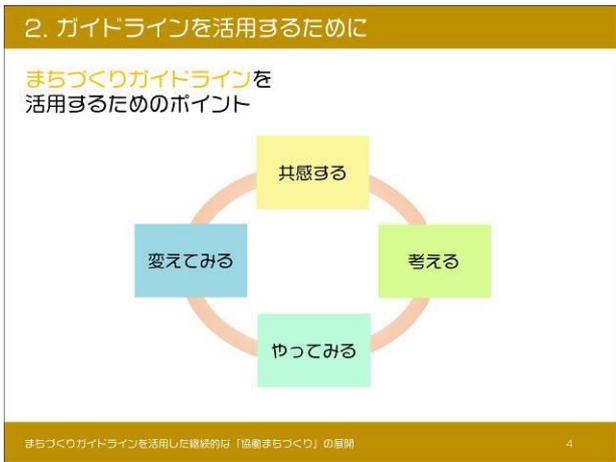
その3か所の中で今住んでいる家が含まれるという方はどのくらいいますか。挙手をお願いします。結構いますね。ありがとうございます。

では、職場、働いている場所が含まれるという方、挙手をお願いします。あまりいないですね。

では、今度は違う聞き方をします。横須賀にお住まいの方。多いですね。そうしましたら、今思い浮かべた3か所の中で、3か所とも横須賀市内だという方はいますか。素晴らしいですね。2か所だという方。1か所だという方。0だという方。これは、いないですね。というように人と場所の関係は、街によって、あるいはどういう人であるかによってかなり変わってくるものです。今のような、本来はもっとちゃんとした調査になりますが、ちゃんとした調査と人がどのように行動しているかというデータを最近はどんどん取れるようになってきたので、そのデータを組み合わせるとどんな場所が、どんな人にとって、どんな意味を持ちやすいのか、ということが明らかになります。そして、こういう研究をしていることが、先ほど神谷先生のお話にもありましたが、「場所づくり」、「パブリック・メイキング」とも仰っていましたが、街の中に人の居場所を作るということに繋がるということで研究をしています。それで、この概要はガイドラインの活用に関わってくると思います。ただ、ガイドラインを作れば必ずうまくいくということでもなく、どうしたらうまく活用できるかということと一緒に考えさせていただきたいと思います。

あとは、小・中学生向けにワークショップをやることが多いですね。自治体でも、お話をさせていただくこともあり、また神谷先生のお話にもありましたが、演習という形でも横須賀中央にも関わらせていただき

ましたので、今回もそのご縁でオファーをいただきました。



最初に、街づくりガイドラインを活用するためのポイントということで、このようなサイクルを考えてみました。まず、「共感する」ということから始まりまして、「考える」、「やってみる」、「変えてみる」ということ繰り返していきたいと考えています。そして、それぞれどういったことかということをお話させていただきます。

まず、皆さんで物事を進めていこうという時に「共感する」ということが非常に大切になります。

この「まちづくりガイドライン」は、地元の町会や商店会の皆さんをはじめとする協議会の皆さんが議論を重ねて作ってこられたものだと思います。その思いということで、どういうことを考えて作られたのかということをよく話を聞く。それからどのようなことが書かれているのかよく読むことで、中身を知る。そして、中身を知ることから思いを「共有できる」とうことで、これが大事なことだと思います。

それに先立ちまして、私の中の整理としてガイドラインには色々な種類のもので世の中にあります。良く聞くものとして、「デザインガイドライン」とか「景観ガイドライン」というものがあります。それは、建物の形などを決めていくことによって、まちなみを調和させようというのが目的になります。

それから、今回のような「まちづくりガイドライン」というものがあります。そして、画面上にオレンジ色の枠で囲われている大きい画像は、東京駅前の大丸と呼ばれている場所のまちづくりガイドライン、そして小さい画像の方は、景観デザインマニュアルになります。という形で、まちづくりガイドラインの中に景観ガイドラインが含まれる場合もあります。

それから一番右側は、協働ガイドラインということで、皆で一緒にやっていこうという「協働」のまちづくりをどのように進めていくかということ専門にガイドラインにする自治体も多くなってきています。仙台市などは、毎年どのように協働の事業が行われたか報告書を出していたりしています。最近では、まちづくりガイドラインの中で「協働」というものについて大事にしていこうと重視する傾向が強くなってきました。

これをざっくりとした視点で捉えてみると、まちづくりの「ハード」と「ソフト」の問題に分けて考えら

れるのではないかと思います。「ハード」は形態。

「どんな街並みにするか？」という視点ですね。一方、「ソフト」は活動。「街でどんなことをするか？」という視点です。そして、それら2つをどう運用していくか、それぞれの運用をどう考えるかということも含めて、デザインガイドラインの運用を考える必要があると言われていました。

こちらは、鎌倉市の深沢というところから事例を持ってきたのですが、ハード面をどのように運用していくかということ、協議会と市役所が協議をして「このよな街にしていこう」ということが書いてあります。そして、下のソフト面というところでは、タウンマネジメントをする組織を作るということが書かれています。

ハード面の運用は、協議会の窓口が市役所に置かれて、十分に機能すると思います。となると大事なのは、ソフト面。活動をどう起こしていくのかということがより大事になってくると思います。そのために必要になってくるのは、「共感する」、「考える」、「やってみる」、「変えてみる」というサイクルになると思います。

このハードとソフトの2つがどちらか一方だけやっても街の魅力というものは高まらないので、両方を大切にしていきたいと思います。これがこれから大事になっていくことになると思います。

大学の演習で「ダウンタウンプラン」を作成した時の私たちのグループでも、こうした問題意識を持っていました。当時の提出用パネルの1枚目の冒頭に書いた、「なぜダウンタウンプランが必要なのか？」という文を読みたいです。

「現在では、都市にまつわる問題が多様化しており、従来のような行政による事前確定的で誘導・規制を中心とする都市計画だけではその改善に向けた実効性に

限界があると言わざるを得ません。これを解決するため、各地の自治体において計画策定プロセスへの住民参加の仕組みが整えられようとしています。こうした動きに歩調を合わせ、より長期的な視野に立った都市づくりを進めるためには、都市の将来の空間像や実現するための仕組みを提示するに留まらず、立てた計画を評価・修正する柔軟性を持ったプランを作成する必要があります。また、都市間競争が激しさを増し、人口減少による税収の減少が見込まれていることを背景として、従来は行政が担ってきた都市サービスの維持などについても住民や民間企業、NPOといった多様な主体が協働して担うことが求められています。こうした協働を実際に前へ進めていくためのプロセスを提示するのも、ダウンタウンプランに与えられた役割であると考えられます。」

提出直前に倒れそうになりながら書いたということもあって、自分が書いた文章ではありますが改めて読み直してみると「どうかな？」と思う部分もありますが、基本的なところ、プロセスが大事ですよというところは、今回の街づくりガイドラインと共通するところかなと思います。このようにガイドラインで、どういうところを重要だと考えたらいいかということ、皆さんで改めて確認していくことが最初のステップとして重要なのかなと思います。

さて、いよいよ我々東京大学の学生がどんなことに着目して、どんな提案をしたか紹介したいと思います。

2017年度には私たちの学年の4つの班、2018年度には一つ下の後輩たちの4つの班が、それぞれ「横須賀中央エリアのダウンタウンプラン」を作成しました。

計画の対象は2050年頃の将来像を念頭に置きつつ、「10年後まで」のプランを考えることが課題の内容です。

まず、基本的な作成手順としては、現状分析を行い

ます。例えば、良い所としては海と山が両方見える景観であることや軍港都市としてあるいはドブ板通りなどの観光資源があること。それから、裏の小さい路地が多く残っていて、そこにいいお店があると我々皆感じた事です。私が演習できていた時は、相模屋というところで、立ち食いの焼き鳥を5本ぐらい食べてから東京に帰るということをしていたため、計画を考える時も「あの路地は消さないぞ」ということで考えました。ところが、あの路地に大きなビルを建てた班もありました。



ここで一つ紹介したいのが、ある班が「現状を把握」ということで、「賑わいポテンシャル」という指標を考えていました。赤色が「賑わいを感じる」場所ということになっています。どうでしょうか。皆さんの実感と比較していかがでしょうか。青い所は賑わっていない。この班はこう考えました。私の意見ではありません。この班の考え方は、色々な人が集まる場所ほどポイントが高いと考えたようです。

これは、演習の課題であるため、課題を提示しなければいけないということもあり、各班競い合うようにたくさん課題を見つけております。

まず、交通の分野では、内側の道路にも通過する自動車が多く危険であるとか、観光地へのルートが分かりにくい、というような課題を見つけました。

土地利用に関しては、市役所前にある公園があまりうまく使われていないのではないかと、あるいは自由に使えるオープンスペースが少ない、空きテナントが多いという意見がありました。アーバンデザインに関しては、樹木が少ないなどが挙がり、ここを改善していけばもっとよくなるのではないかと演習の中では提案が出ていました。

土地利用の方向性については、各グループの「将来土地利用図」を比較してみましょう。



赤い所は商業施設、緑色が公園というようにだいたいの色使いは合っていると思います。

まず市役所前公園に注目します。公園の範囲について、現状維持が3グループ、2街区分に拡幅するのが4グループ、2. 5街区分に拡幅するのが1グループ。2街区に拡幅した4グループのうち3つは西側の街区を、1つは北側の郵便局がある街区を公園にしています。議論の過程では、結果的に現状維持としたグループも含め、どこのグループでも「公園をどこまで拡幅できるか？」という論点が上がっていました。

さらに申し上げると、南側の街区には「これからマンションが建つ」ということが演習の時点でわかっていたため、ほとんどの班が「集合住宅」としていますが、「ここがマンションでなければ」という意見が多く、「低層部に商業入れました」とか「ここに保育施

設を持ってきます」などの意見もありました。

逆に市役所前公園北側の郵便局のところについても、各班が将来の提案をしています。例えば、図書館や保育園を建てようということで、どの班も共通しているのが公園と一体的に空間を整備し、活用していきたいということです。そして、この背景には公園の魅力というのは、公園の敷地だけを何とかしようということではなく、周りの建物や景観も含めて、一つの魅力を創り出すということが考えられますので、その考え方の一つだと思われま

す。また、さいか屋やプライムという場所は、この地区の中では非常に重要であるということで、ここで改修や建て替えを行う際は、建物の形を工夫することで観光資源へのルートをはっきりさせた方が良くはないかという意見もありました。

2つの班が再開発しやすい場所はどこなのかという図を作っております。左側の図は、薄い青色の車線がひいてあります。右側の図は、赤い枠で囲ってあります。この場所が再開発しやすいそうです。その結果、実際にどの場所で再開発をした方が良く計画したかというところをピンク色で囲ったところは、再開発ができそうなのでした方が良く、青色の囲いは、再開発しない方が良くはないかという提案になっております。

このように学生が色々と考えているのですが、ここまでは土地利用に寄った考え方の話ですが、ここからは、活動に寄った話になります。

ある班がここにポートマーケットを作りたいということで、図面が書かれております。

このポートマーケットのイメージは、バルセロナのラ・ボケリアのようなイメージで、ここにちゃんとした建物が建っていてその中に小さなお店がたくさん並ぶようなもので、イタリアやスペインによくあるものですね。もともとは自然発生的に露店が集まってきた

ものですが、ここに市や県などの行政が法的に建物を建てて市場をやっていいと認可をして、このような建物が建ったという経緯があります。

こうしたものが賑わいの中心になっていて、これが街の人にとって、街の誇りにもなっていると色々な街で言われています。

横須賀で考えてみますと海や山の食材を集めるのには適していると思いますし、アメリカの文化とも接する機会が多いので、より多様な食材を手に入れられる場所になることも期待できます。観光の目玉であるとともに、住民の生活にとっても大切な場所であるということが、これから街を訪れる人にとってより魅力的に映ると思います。ここまで大規模なものでもなく、公園をうまく活用した「パークマネジメント」というものを考えた班があります。具体的には、公園にキッチンカーを呼んだり、ビアガーデンを開催したりということを提案されています。また、ビルの壁面をスクリーンにして映画を観るという提案もあり、実際に日本でも新宿中央公園に大型のスクリーンを設置して、野外でたくさんの方が映画を楽しみました。また、恵比寿のガーデンプライスとか、調布、東京ミッドタウンなどの様々な場所で行われています。このイベントは、もともとは小さな子供が騒いでも気兼ねなく映画を見られるようにしたいと、河川敷で実施したのが始まりでした。こうした、市民が公共空間でやってみたい、と思うことを気軽に実現できるような公園になると、新しい発想がいろいろと生まれるようになるかもしれません。

それから、「シェアードストリート」という考え方も提案されています。これは、歩道と車道という区別をなるべく無くして、車も自転車も同じ空間を共有しましょうという考え方です。これをやると交通事故が増えるのではないかとと思われるかもしれませんが、実

際に広場でやってみた例を見てみると自動車の進入速度が前より下がるということがあったみたいです。

例えば、横須賀の市役所前公園を広げて、真ん中に道路があり、車が通るようにすると北米の都市であるピッツバーグのような空間になるかもしれません。周りの建物を見てみるとオープンテラスのようになっており、たくさん椅子が外に出ていて、活動が広場全体に染み出している様子が分かります。

今は、市役所前公園と周りは道路ですが、使い方を少し変えてみるとこのような空間を創ることが可能だと思います。

この広場は、色々なことが行われており、祭りやイルミネーションの点灯、抗議デモまで行われます。そして、ここに集まると何かができるとゴルフを始める人など、自由に何でも初めてしまいます。

この写真は、ピッツバーグの街の写真になります。この場所は、「ダウントウンパートナーシップ」という組織があり、ここに地元の企業、都市計画・まちづくり専門家、行政、民間の財団、住民などから構成されており、スポンサーも多くいます。WEBサイトでは、毎日「この場所では何があるのか」公開してあります。それからもっと面白いのは、毎年「こんな活動を我々はしました。」「その結果これだけ街が良くなりました。」ということをこの組織が、報告書としてまとめています。この報告書がWEBで公開されているほか、配布などもされています。これ、何が大事かと考えているかということ、地元の関わっている方がこの街について関心を持って毎年、どうなっているのか調べていることです。これだけのクオリティをもって毎年行えるのは、関心が自分の街に向いているということ。そして自然と街が良くなっていくことになると思います。

これが我々の発表の1枚目になりますが、1枚目の大半を使って、アーバンデザインセンターの構想を描

かせていただいております。これは、市内の各地区にこの街のエリアマネジメントを具体的にを行い、組織を作って、それに代表者が集まる市内全体の会議で全体的なことを決めていく。活動内容は、色々と書かせていただいておりますが、エリアマネジメントは最近だと株式会社としてもやっているところもたくさんあるみたいです。なんとかすれば、お金も自立して回すことができるようになっていきますので、アイデアとしてはあるのではないかと考えています。

このアーバンデザインセンターという元々の考え方は、「柏の葉」という千葉県の柏市にある新しい市街地で「柏の葉アーバンデザインセンター」のいうのが2008年にできていて、起源になっている。機能は少し異なりますが、名前は合わせています。全国各地にアーバンデザインセンターができていて、ここでは行政と大学と民間企業が一緒になってエリアマネジメントを行う、そのための事務局の場所を作って、色々なワークショップを開いたり、街の歴史的な資料が見られりするように活動をしているものです。

このように我々も演習で考えたようにこの街で何ができるのだろうか、何がしたいかというところを考えたなら、その先に行くことが一番大事になってきます。ところが、それが一番難しい。ということで、「やってみる」ということが色々な事情でできないことが多いです。これは、最初からすぐ効果の出ることをずっとやろうとするのが、難しさの原因にあると思います。まずは、自分たちでアイデアを交換して、やってみようと「参加の場」それから「実践すること」を短くやるのが大事になってくると思います。その例として、社会実験というものがあります。

一昨年秋に東京の神田という場所で行われた「神田警察通り賑わい社会実験」というものを行いました。2016年から2年連続で行われました。お金を出してい

るのは、隣接している大手町の地主のディベロッパーです。ここには、デンマークから有名な建築家も招き、この街でこんなことやってみたいという人を100名ほど一堂に会し、私はここでこんなことをしたいというアイデアをみんなでより集め、チームを組み、1週間街の中で賑わいを生むような活動をしてみるということでした。その一つとして、我々東京大学チームは、コインパーキングを1週間ずっと駐車料金を払い続けてその場所にキャラクターを置いて、野菜が買えるということをやりました。これは元々、アメリカで「パークレット」というのが広まっており、それはコインパーキングがずっと並んでいる道の1・2台分の駐車場スペースを一定期間借りて、ベンチを置く、または芝生を敷いたら人の街の使い方や歩き方がどう変わるかということを実験的にやってみるというもので、カリフォルニアのサンフランシスコで始まりました。現在は、全世界に広まっており、インスピレーションを受けまして、こういう活動をしてみました。そして、この1週間は非常に盛り上がりましたが、この後が続きませんでした。これは、簡単な話で「やりたければやってください」と言って何もサポートが得られなかった。

これをずっと繰り返してやっていくためには、1回きり予算を付けただけではなかなかうまくいきません。

そういったことも含めてどういった枠組みを作ればいいかが必要な検討事項になると思います。

こうした社会実験等をやっていくと「こんなことをやってみたい」、「そのためにはこんな空間が必要になる」といった共通の認識が出てきます。

そうしてくるとまちづくりガイドラインの「ここが嫌」、「ここを変えた方が良いのではないか」と思った時に変えていく仕組みもこのガイドラインにはあるため、活用していくことが必要になる。

そういう時もガイドラインは誰かが勝手に変えてくれると思うのではなく、皆で変えるか変えないかを話し合うことが必要だと思います。

では、最後です。

まずは知った上で、共感する。そして、何をしたいか考える。そして、実際に短い期間やってみる。そして、何回もやってみて街がちよっとずつ変わってきたなと感じたら、その部分を変えてみよう、といったようにこのサイクルを回していく。まちづくりを成功させるためには、このサイクルを、プロセスを多くの人が楽しめるようにする、楽しめるようになることが大事だと思います。

新しいことを始める時に「イノベーター理論」というものがあります。最初の全体の2.5%程度が何か新しいものがあれば、何でも飛びつく方。その後の13.5%ぐらいの人が新しいことがあるから取り入れてみようとする方。そして、その後の大部分の人は、その16%の人たちが利用して、良いなと分かると利用し始めます。まちづくりについても16%、だいたい6人に1人の仲間を作ると加速して行くのではないかと思います。

今日ここに来ている皆さんは、最初の人々になっていただき、自分の周りの皆さんと色々アイデアをたくさん話し合っていていただき、実行に移すことで仲間を少しずつ広げていくことで、このまちづくりガイドラインがうまく活用でき、賑わいのある横須賀中央が実現するのではないかと思います。

長くなりましたが以上で、私の発表を終わります。

皆さん、ありがとうございました。

パネルディスカッション

[コーディネーター]

神谷 裕直さん (株計画工房)

[パネリスト]

上田 滋 さん (大滝町会会長)

国吉 直行さん (横浜市立大学GCIシニアアドバイザー)

井上 拓央さん (東京大学大学院都市工学専攻)

小山美智恵さん ((一社)神奈川県建築士会)

○司会 それでは、これよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

まずは、出演者のご紹介です。

舞台左手は、先ほど講演をして頂いた神谷 裕直様です。

このパネルディスカッションのコーディネーターを務めていただきます。

どうぞよろしく願いいたします。

続きましてパネリストの方々のご紹介です。

舞台右手中央から、大滝町会会長の上田 滋様です。

横須賀で生まれ、大滝町会に所属し、町内会の会長を務めておられます。

そのほか、40年に渡り「クリーンよこすか」の活動をされています。

また、皆さまのお手元にある「横須賀中央エリアまちづくりガイドライン」を作成した「横須賀中央エリアまちづくり検討会議」の座長として横須賀中央の街づくりに深く貢献されておられます。

どうぞよろしく願いします。

次に、横須賀市景観審議会委員の国吉 直行様です。

早稲田大学大学院建築学科修士課程修了後、横浜市企画調整局に入庁し、横浜市職員時代は、40年以上横浜市の都市デザインを担当されてきました。

その後、横浜市立大学国際総合科学部の特別契約教

授として就任。

現在は、横浜市立大学グローバル都市協力研究センターのシニアアドバイザーとして海外でも活躍中です。

横須賀市との関わりも長く、横須賀市景観審議会委員として、横須賀市内の景観政策にご協力いただいております。

どうぞよろしく願いいたします。

次に、先ほど発表をしていただきました井上 拓央様です。

どうぞよろしく願いいたします。

最後に、一般社団法人神奈川県建築士会横須賀支部 小山 美智恵様です。

札幌の出身で、芝浦工業大学工学部建築学科をご卒業後、建設会社設計部及び不動産会社の企画業務に携わられました。

現在は、横須賀で「アーキジャムワークショップ 一級建築士事務所」を主宰され、主に住宅や店舗の企画、設計、リノベーションを手掛けておられます。

また、日本の文化や生活に関心があり、津久井にあります歴史的建築物である「万代(まんたい)会館」の保全活用に関わる活動をされています。

このフォーラムの主催者であるよこすか都市景観協議会に属する立場でもありますが、今回のパネルディスカッションでは、建築家として、横須賀市民としてのご意見をお聞きしたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

以上4名のパネリストのみなさんです。

本日のディスカッションのテーマは

「横須賀の景観 語ろう中央エリアのまちづくり」でございます。

ここからは、コーディネーターの神谷様に進行を委任したいと思います。

よろしく願いいたします。

○神谷氏 それでは、第2部パネルディスカッションに移りたいと思います。

ディスカッションの進め方としては、まず国吉先生、小山さん、上田さんの順に発表していただき、それぞれの発表の後に意見交換をしていきたいと思います。

では、国吉さんから前半の部分と関連付けながら、10分程度レクチャーをいただきたいと思います。

○国吉氏 まずは、神谷先生と井上さんの説明に感銘を受けました。そして、まちづくりガイドラインの運用がスタートするとのことで、非常に喜ばしいことで、おめでとうございます。

私の方からは、長年横浜で取り組んできたことがあるため、それも踏まえて話したいと思います。

先ほど、井上さんの発表の中で、非常に面白い整理をされていたと思います。必ずしも街が4つのサイクルで回るわけではなく、別のところからスタートしたり、逆回転で進んだりすることがある。横浜で40年経験してきたことがあるので、お話したいと思います。

横浜は、非常に観光客が訪れている街ですが、私が一番横浜の中でも力を入れてきたのは関内周辺地区であり、昔からの横浜になります。

昭和40年代というのは、関内地区は非常に寂れておりました。そういった中で、横浜駅周辺に商業地ができ、将来的にみなとみらいができるようになった時に、この街はどうなるんだろうと考えることになりました。その時に、同じような事例を求めるのではなく、この街らしい発展の仕方があると考えました。先ほどの講演の中でも「横須賀らしい」という話があったと思いますが、東京と同じように商業地を発展させたとしても、東京に持ってかれてしまい、他の便利なところに食われてしまいます。

ですから、関内や馬車道はどのように進めればいいのか。それは、まちには色々な商店街とかもあるが、

その街全体が一緒になって楽しんでもらうような街にしていけないと商店街だけでは人は来ないと考えました。そこで、街を開放させる。そのためには、広場を大事にすることで、街を繋いでいこうと考えました。

もう一つは、横浜のイメージを打ち出そうということです。汚い街になっているけど「ミナト横浜」なんだ、あるいは開港を抱いた伝統がある、そういうことを大事にして、かつ新しいものを入れていく。伝統と未来を共存させる売り出し方をしていくということでした。

そして、山下公園周辺地区ですが、最初に動き出したのは、馬車道商店街です。この街をどうやって頑張っていけば良いのだろうとなった時に、横浜市経済局というところが商店街振興として補助金を出してくれることになりました。そして、私どもがやっている歩道を整えようということを見て、今ある3.5mの歩道にタイルを張ることが、地元の要望でした。色々な専門家の方と一生懸命議論した結果、タイルを張っただけではしょうがない。本当に良い街にするには、この街に来たいと思うような魅力を作っていかなければいけない。ということで、検討会を2年間行いました。それで、歩道を歩行者が歩きやすいものにしないといけない。そのためには、もっと広い歩道にしないといけない。そのためにはどうしたらいいのだろう。あるいは文明開化の街を感じられるようにするには1、2階にどういう店舗が入ればいいのか。などの議論が行われ、2年後に街づくり協定ができました。これは、壁面後退のことや歴史的な雰囲気や歴史を大事にすること、建物の様子を整えるなどの考えを自分たちで編み出していきました。私は、あくまでも専門家という立場からお手伝いをしていました。

ちなみに、この街づくりガイドラインは、馬車道商店街の人たちが発想したものです。専門家である私は、

歴史に意図したという考え方だとテーマパークみたいで嫌だなと思ったこともあります。それでもやはり地域の人が代表して打ち出そうと言った時に、専門家は付き合いすることが大事であると考え、フォローしていきました。そして、地元の委員会がルールに沿って、設計者の計画に対して、一生懸命議論をする。そして、地元の街づくり協定をパスした後、初めて確認申請を出すといったプロセスができてきました。

馬車道は、歌にも歌われるように観光客がくるようになりました。そして、馬車道の整備された様子を見て刺激を受けた隣にあります伊勢佐木町も、自分たちで何か頑張ろうとされました。そして、馬車道とは違うスタイルでやりましょう、そして元町も、中華街もとどんどん変わっていくのですが、それぞれが横浜の歴史を大事にしながらかつそれぞれが異なる面白さを持つ、そしてみなとみらいとは違う。例えば、元町なんかは、巨大なビルを作らない。大きなビルを作ったとしても、絶対にみなとみらいには敵わないから、むしろ、小さなものを残した方が人は寄り付くと考え方を切り替えました。全体として色々な街で楽しめる街がある、そしてみなとみらいと対抗することができる。

元町では、自分たちの街づくり憲章からまちづくり協定、そして重要なところは法律で抑えてキープしていこう、と地区計画の制度で用途は制限しています。そういう法的なもの自分たちだけのルールを柔軟に組み合わせたルールブックを作っています。

そして、そのことがみなとみらい地区にも発展し、「まちづくり基本協定」というのを作りました。そこで、海岸沿いの建物の高さなどをまちづくり協定で作成し、そして地区協定で作ろうとしました。そして、赤レンガ倉庫のある地区と色彩的に対峙するなど、そういうことを意図的にやらないと人は来てくれない。

横須賀についても、先ほどご紹介した浦賀のまちですとか伝統ある街がたくさんある。そういうところの玄関口として、横須賀中央に来れば横須賀の伝統のことが一通り分かるような街であっても良いのではないかと思います。

また、新たな活動が起こるような、実験が行えるような街であってほしい。先ほどの提案にもあったように、横浜でも通りをパークレットみたいにしてみたり、色々な街の中で結婚式をしてみたり、様々な実験活動が行われています。行政も管理の運営形態を緩め、道路の使用の条件をどんどん緩める代わりに、地域で管理しなくてはいけない。そういう実験と運営を通じて街が変わっていくことが今の時代ではないかと思いません。神谷さんが仰っていたようにこれからのまちづくりはハード面だけではなく、ソフト面も重要であります。横浜もまだまだ変わっていかないと若い人が来てくれないため、頑張っています。その辺のことを横浜の事例を元に紹介させていただきました。

○神谷氏 どうもありがとうございました。

各パネリストの方から今の国吉先生の話聞いて一言ずつぐらい意見交換をしたいと思えます。

まずは、国吉先生の話ベースに上田さんからお話をお願いします。

○上田氏 大滝町会の上田です。

ただいま、国吉先生から横浜のまちづくり、即ち関内と伊勢佐木町付近の再開発ということで、非常に取り組みがうまくいったのではないかと私も思って聞いていました。では、横須賀の場合それがうまく適していたのかなと考えた時に、一つ言えることは我々の街も個人の商店だけでこれから何か考えて店づくりしていくことは不可能に近い時代になってきているのではないかと感じている。何が言いたいかというみんな考えて、自分の店も含めて街づくりをやっていかな

ければいけないと感じている。ただ、一番大事なのは、自分たちでやるのだということです。行政に任せておくことや行政がやったことに後から我々が付いていけばいいのだということでは絶対にうまくいかない。先ほど、神谷先生もお話していましたが、私も非常に感じております。

具体的な話をします。

結構前の話になりますが、市役所前公園に駐車場ができました。「びぼ 320」です。25年、30年ぐらい前のことかな。あのころ、市はちょうど平成町の埋め立てがスタートし、これから大型店が平成町にできると中央エリアの商店は、よりお客様が動くだろう。そうならないためにもあの時期は駐車場が少なかったため、駐車場を用意しなくてはいけない。本来は、個々のお店が駐車場を用意しなくてはならないが、スペースがないため無理だろう。であるならば、市が公園の下を駐車場にして、お客さんを食い止める形で手伝おう。ついては、地元も一緒にやりましょうとスタートしました。色々ありまして、駐車場が出来上がりました。運営には、第三セクターで町内会や商店街の人が一緒に入って作ろうとスタートしました。当時私は、まだ関わっていなかったのですが、ある会議が終わり、知り合いと一緒に帰ろうとした時のことです。私は車を市役所の北口に停めていました。その知り合いは、第三セクターの委員をやっていたので、当然「びぼ 320」に停めていると思っていたら、北口駐車場に停めていると言われました。それはどうしてですかと尋ねると、「びぼ」は、駐車場の入り口が狭くて入れるのが面倒くさいと言われました。この方は、委員をやっていたのに何故このようなことが起こるのかと言うと、委員になっていた人はほとんど行政任せで運用していたからです。私が言いたいのは、行政が悪いのではなく、地元が悪いということ。地元が自分た

ちの街に作らなければいけないものを真剣に考えて作っていなかった結果、このような事態になったと思っています。今回のガイドラインを作ってくるまでに、一番感じていたことはこれです。これからは、このガイドラインをどう活かしていくか、それをどのように運用していくか。これが一番強く感じていることです。以上です。

○神谷氏 それでは、順番に井上さん何かありますか。

○井上氏 まず一つは、まちなみを綺麗にしよう、調和と一緒に保ちましようと言ってもなかなか賛同しない人がいると思いますが、その一つの理由としては、そもそも調和しなければならないような街並みなのか？、と所有者が思っているという点があって、ここをこれだけ綺麗にすると人がたくさん来て、良い街になると分かっていないと自分の建物もこのようにしようと思わない、と言う流れがある。逆に決まったから守ろうとする両方のバランスがないと、うまく人がのってこないということがある。それを考えると、先ほどの発表でもお伝えしましたが、短期的にこのような活動をやってみようと、そうしたらこれだけ賑やかになったね、と体験をしていく。それを積み重ねていくことで、確かにこうした方が良いかもしれないね、というように納得する人が増えていくと考えております。

○神谷氏 ただいま、とにかくやってみようと言う話がありました。それでは、国吉さん。横浜では成功例があって、その時はどのようにやってみようとアクションをさせるきっかけを生んだのですか。

○国吉氏 横浜の場合、こだわりが強い人が多く、お付き合いを始めたころは困ってしまいました。僕らが東京で学んだことを提案しても「それは東京でやってくれ」、「ここは横浜ですから」と言われてしまったこともあります。しかし、そういうこだわりが強い方々の発想の中に参考になる考え方が多くあり、具現

化していこうと動き始めました。ただ、壁面後退とかの話になると地権者などの反対にあった。そうすると、たまたまその地域のリーダーである理事長が自分のビルを作っている最中で、「とりあえず俺の作っているビルでやってみるか。」と言ってきて設計変更をしてくれました。私が、1、2階を壁面後退したスケッチ案を作ってあげた。するとその理事長は、完成した時に新聞記者を呼んで、全国に対して馬車道でこんな街づくりを始めたと発表した。再開発ではなく、一つ一つを少しずつ工夫してそれを積み重ねが小さな広場がある街ができるのだ、ということを発信したところ、まだまちづくり協定ができていないのに、全国から教えてくれと色々な人が見学に来ました。そうすると反対していた人が、良いことなのかもしれないと思い初めてくれ、2年間の研究会が終わったころには、賛成が9割に変わってました。やはり、地元の人が理解しながら、引っ張っていく、自分たちが当事者意識を持って引っ張ってケースが多いと思います。

○神谷氏 誰が引っ張るかという話には二通りあって、昔は誰かがバカになってやってくれる人がいないと街はできないと言われていました。しかし、国吉さんの話は、もう少し楽にやっついこう、やってみようという所から広がるという話でもありました。

小山さんに、地元の方としてどう思うか少しコメントをいただきたいと思います。

○小山氏 私が今話を聞いて思うのは、日本の文化自体が、土地や建物を自己所有することになってから短いので、「自分の所有しているものに対して好きなことをして何が悪い」という思いがあるように感じられることです。なので、例えば景観が良くなれば自分の住んでいる所も気持ちが良くなるし、皆も気持ちが良いというようになかなか考えが及ばないように思われる。それを、どのように伝えていくか、活動が重要

だと思いました。

○国吉氏 横浜市役所全体としては、非常に硬直しており、そういう発想はありませんでした。私は専門家として、当時の制度ではまだできることが限られていたため、良い街にするために気楽にできることからやってみましようかと提案してみました。すると、当時の委員長や関わっている人たちが乗ってきてくれたことがスタートでした。発想を柔軟に持つことが重要だと感じました。

それと、街がダメになっているという意識があったことが重要だと思います。元町は、当時そこまで問題意識を持っていませんでしたが、馬車道が評価され始め、我々も頑張らないといけないと動き始めた。そういう意味では、横須賀はまだまだ問題とっていないのかな。この街は今の状態で充分だと思っているのかもしれない。県外から見ると良い素材がいっぱいあるのに使わないもったいないと感じてしまいます。それを皆で発見し、活用していけばよいと思います。

○神谷氏 では次に街を良くしていくためには、物理的な、形態的なことだけではなくソフトな部分が非常に重要です。ソフトな街づくりを横須賀がしているということで、横須賀に対してヒントとなるような視点で、小山さんに簡単に発表をお願いしたいと思います。

○小山氏 それでは、私からは三浦半島の今後の取組みにヒントになりそうな、楽しそうな事例を5つほど紹介させていただきたいと思います。

この写真を見てどこか分かりますか。これは、福島県糸島市です。糸島といっても島ではなく、福岡市から西にある唐津方面に向かう途中にある半島の付け根にあります。ここは中心市街地から近いのに自然が豊かという特徴を生かしたまちづくりを行っています。このフレーズを聞いて横須賀の特徴と似ていると私は思いました。

糸島市と福岡県で構成する「糸島地域広域連携プロジェクト推進会議」という組織で、「見る・知る・遊ぶ」で糸島の「歴史・文化・自然・産業」をまるごと体験というプログラムを準備して野菜の収穫をしたり、クラフト作家とものづくり体験をしたりしています。

「糸島トライアルステイ」という3週間移住体験ができるプログラムを2011年からある企業が行い、17組の定員に対して200組以上の応募があった年もあったそうで、その中からそのまま移住した人もいます。

食べ物とお金とエネルギーをつくる「いとしまシェアハウス」という人たちもいます。彼らも短期住人を募集したり、仲間と楽しみながら発信しながら、合宿のような日々を送っているようです。

こちらはどこかわかりますか。

これは、十日町市です。新潟県南部に位置していて、川や山などの自然に恵まれたまちです。十日町市の竹所という豪雪地帯の集落は人口が減少し、一時消滅を危惧されていましたが、ドイツ人建築家のカールベックスさんに救われました。

これは、パースになりますが、一般的な古民家再生と少し違ってピンクやイエローなど色鮮やかな景観を里山に吹き込み、結果、移住者が増えたそうです。

ベックスさんは古民家再生以外にも休耕田を利用して水芭蕉を植え、古民家との統一感を出すために牛小屋の外壁を修復する活動も行いました。これは、「村全体を美しくデザインすることで、住む人にも訪れる人にも楽しい場所にできるだろう。人が生き生きと住むことができれば、家や村は次の世代に受け継がれ、存続することができる」と考えているからです。ここでも1970年代に建てられた木造家屋を修復してシェアハウスとして貸し出し、「お試し移住」を実施しています。

自然景観だけではなく、3年に一度、国際芸術祭ということで「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」という織物のような伝統文化と現代アートを融合したイベントも行っています。「越後妻有アートネックレス整備機構」として十日町広域行政圏を「アートでつなぐ」という意味を込めて名付けたものがあり、その成果の発表の場として「アートトリエンナーレ」は企画されています。

これは、その作品の一つでアルゼンチンのレアンドロ・エルリッヒさんの「パリンプセスト」という作品です。「パリンプセスト」これは文字を上書きした羊皮紙の写本という意味だそうです。回廊に囲まれた大きな池の水面に光が反射し、空や建物を鏡のように映しています。建物の2階に上がって池を眺めると、建物の鏡像が複層化している不思議な感覚の現象に気がきます。そしてある地点から見た時、複層化した鏡像は完全に一致するというものです。

もう一つ作品をご紹介します。清津峡渓谷トンネルをリノベーションしたプロジェクト「ライトケープ」という作品です。エントランスに足湯の施設があり、「温かいお湯から冷たい水へと地球のエネルギーを感じてほしい」というのが作者の建築家マ・ヤンソンさんのねらいだそうです。

次は、小倉・メルカート計画は福岡県北九州市のシャッターが目立つようになった商店街が生まれ変わるきっかけとなった、築50年の木造2階建ての空き家ビルのリノベーションに始まりました。ここは若いクリエイターの拠点となっています。仕掛け人の建築家は嶋田洋平さんと言いますが、「空き家はポテンシャル」だと考えています。

次は、島根県海士町は隠岐諸島の中ノ島にある町です。最新の冷凍機械技術を導入して日本中の個人のお客様や郷土料理店などに海士町ならではの海や山の幸

を鮮度を保って届けられるようにしたことで、多くのファンを増やしたそうです。離島からの航路上の問題を解消したことで、島全体の人の自立を目指す町おこしをしています。

海士町は財政破綻寸前の町でしたが、廃校直前の高校を島留学という方法で、難関大学進学を目指すコースや地域づくりを担うリーダーを育てるコースなどを新設したところ、入学希望者が殺到するようになりました。島留学のポイントは、多様性と言うもので変化や想像性を吹き込むことで、離島が周囲から閉ざされた環境になりやすいことを克服しようという試みでした。

続いては、埼玉県久喜市です。

農産物以外に特色がない印象だった街でしたが、鷲宮神社がアニメ「らきすた」のモデルになったことで、聖地として注目されました。そのことをきっかけに商工会議所が中心となってお饅頭など次々と売り出し、商店街の活性化に結びつけたものです。

次が、岩手県二戸市です。こちらは、若者がお盆やお正月にも帰省しなくなったことに危機感を持ち、帰って来やすくしようという思いで、「集落の景観づくり」「ふれあいの場づくり」「コミュニティづくり」のため、幅広い世代が交流するイベントや取り組みを実践してきました。ニューヨークでも農業を中心とした体験型観光をアピールしています。

最後は、長野県南相木村で築100年以上の古民家を再生した、移住定住促進施設「たまる家」の写真です。南相木村へ移住を検討していて、南相木村以外に住所のある人であれば、1泊から6泊まで原則一家族5人程度の人たちが無料で体験できます。この建物は、平成30年度日本建築士事務所協会が優秀賞を受賞しています。

以上、横須賀の参考になりそうな、ワクワクする事

例を紹介させていただきました。総務省も地域おこし協力隊というシステムを作っていて、紹介した事例のまちでも多く登場しています。

このように行政や地域のひとの繋がりというものがある成功の秘訣だと思います。横須賀らしさや横須賀のポテンシャルをポジティブに見つけることがカギになるのではないかと考えています。例えば、海も山もある景色は、海がない地域から見れば、すごく魅力的なことですし、農園もある、先進技術のエリアもある、歴史的な街並みもある、別荘地もある、米軍基地もある、新しくできた街もある。そのような特色を生かしたうえで、横須賀の中心市街地をどのようにすると魅力的になるのかガイドラインを活用してみんな考えて変化に対応できるというなと思っています。

○神谷氏 小山さんが今紹介してくれたのは、横須賀市や三浦半島全体で見た時に、色々なバラエティなものがある、それを事例が示すように拾い上げて磨くことで価値ある物になる、それを連携させることで全体的に魅力的なものになるということだと思います。その中で、ご自身が活動していることも含めて横須賀中央にスポットをあてて、リノベーションのような発想で、どこで何ができると思いますか。なにかアイデアをいただきたいと思います。

○小山氏 横須賀中央の駅前には、人が集まるような場所であればいいと思います。先ほどの提案の中にもありましたが、図書館やこども園があり、買い物もできて、時間が有効に使えるような所になればいいと思います。あとは、三笠通り商店街がかつて栄えていたような、古い時代を感じられるまま活性化できれば横須賀らしい街になるような気がします。

○神谷氏 例えば、裏通りですね。焼鳥屋さんの路地に入っていくとイタリアンがあったり、ちょっとしたスポットはありそうな気がしますよね。この辺を利用

すると良いかなという話を、井上さんをお願いします。確か学生の提案の中でリノベーション的な発想はあったかと思いますが。

○井上氏 どこかのグループが裏の飲み屋街がすごく良いと言っていて、そういう所にリノベーションした新しい店をとっていました。しかし、どういうものがそこにあるのかということと、それにちょうど合うニーズを持っている人は誰で、それはどういう活動なのか、というのはなかなか外部から「こうだと思います。」と言うわけにもいきません。それは、おそらく地元の学生の方がアイデアを持っていることだと思います。あと、私の知り合いの知り合いに、旅館をやっている人がいます。大学生というのは試験前の1週間だけ勉強する人がたくさんいる。そうすると最後の1週間を集中したいが集中する場所がないというニーズがあるということで、「最後の1週間で温泉で勉強しませんかパック」を始めた時に、いわゆるツイッターでバズるという現象が起きました。すごい人が湯河原の旅館に訪れたみたいなきっかけがありました。そのように目の付け所と言いますか、その街で暮らしている若者の方が、実は何かを思っていたりしていると思いますので、そういう所にアプローチしていくことが良いのではないかと思います。

○神谷氏 人がどのように提案してくれるかということもさることながら、自分たちでも何か考えろよということに関して上田さんからお話をお願いします。

○上田氏 ガイドラインでお話した中で、一つだけ先に説明させていただきます。我々は、ガイドラインを作ることが目的だったわけではなく、ガイドラインを作って、今後どのように運用していくかが一番の問題である。本当にこれから始まることだと思う。それには、行政は窓口になってもらう必要はあるかもしれないが、実際の運用は委員になった皆さんがやっていく

こと、自分たちの街をどうするのか真剣に考えていかなければいけないと考えています。

いま、神谷先生からこれから横須賀どうしたらいいのと色々な意見や提案が出てくると思う。井上さんからもバルセロナのマーケットの話も出ました。私はすごく良いなと思いました。でも、提案を出しても必ず色々な理由をつけて、ぶっ壊してくる人が出てくる。その中で、言われることは覚悟の上で、アイデアを出してみたいと思うことがあります。先ほど、国吉先生が、東京に比べて横浜は劣るところがあると言いましたが、そのようなこと言ったら、横須賀は横浜に劣るところだらけですよ。その中で、「横須賀らしさ」ということを活かしていかないと生きていくことができないし、強みもなくなってしまいます。

提案としては、横須賀には米軍基地や海上自衛隊の基地がある。そんな中で、アメリカとのパイプはよその街よりずっとあると思われる。そして、横須賀だけとは言わないが、全国でオペラハウスと呼ばれるホールが3つか4つしかない。横須賀にあるそのホールをもう少し活用した方が良いのではないかと。そして、たくさんの人に来てもらう方法を考えた時に、ただコンサートやオペラをやっても人が集まらない。でも、せっかくアメリカとのパイプがあるのであれば、アメリカの一番大きいメトロポリタンのオペラを持ってきても良い、またはニューヨークフィルの演奏会をやっても良い。これを1か月間日本で、しかも横須賀でしかやらない。そういうコンサートを行えば、日本全国いや世界各国から人が来ますよ。その実例が皆さんもご存知かもしれませんが、ザルツブルグ音楽祭です。これは、ウィーンから3時間で行ける場所です。ウィーンは音楽の都だと言われており、8月から9月は、ウィーンの街でもコンサートはやっていますが、メインの人たちは誰もいません。ザルツブルグに集中しちゃ

う。そして、ザルツブルクという小さな街は、世界中からの観光客を含め、音楽を聴きたい人たちが溢れ、宿泊施設はどこも取れなくなってしまう。ではなぜ、このようなことが起こるのか。それは、その街にしかないもの、そしてここでしか聴けないものを聴くために世界中から人が集まってくる。こういうことができるのは、横須賀ならではのと思う。1 か月程度やりましょうとなったら、宿泊施設はどうするのって思うかもしれないが、別に作る必要はない。2,000 人ぐらい入る客船を呼んで、そのまま宿泊施設として使ってもらえばいいじゃないか。横須賀ならではのやり方は色々あると思います。横須賀市民の人に対しても、客船の中を見学してもらいましょう。客船を宿泊施設として利用すれば話題性もあります。色々なものを企画しながら横須賀らしさを演出していきましょうよ。

私の提案だけではなく、他の皆さんの提案も考え、いくつかを組み合わせればできることがあるのではないかな。もう動き出さないと遅いぐらいだと思う。俺は関係ないよとか、誰かがやってくれるだろうとそういうことでは、よその街と同じように横須賀も衰退していくことが目に見えている。

そして、夢と思う人もいる、無理だと思う人も、誰がやるの、いつやるの、財源どうするの、まだまだ問題はあります。でも、問題はそうではなくて、まず皆で考えてみようよという気持ちを持つことであると思う。残念ながら、さっき言った問題があるからと止まってしまう人が多いと思う。でも、それだと何も変わらない。私が言っているのは、私の提案をしようよということではなくて、そのように考えようよということが必要だと思う。何もせずにじっとしていてもチャンスはやってこない。それを決めるのは市民の皆さんの心があるかどうかだと思う。どこの街でも自分が生まれ育った街が好きではないですか。私は大好

きですよ。だけど、その気持ちだけで終わらせちゃうのか、皆が街のためにやろうとしている時に自分も一緒にやろうとしてくれるか。これが非常に大事ですよ。

色々な人が色々な考えの中で、多くの企画をしてくれば、多くの人に関心を持ってくれると思う。そして、横須賀に行ってみようかとなると思う。今でも、テレビで横須賀のことを紹介してくれているけど、そういう積み重ねが多くの人に横須賀を知ってもらおうと同時に横須賀に来てくれた人が横須賀って良いな、こんなおいしい所があったんだ、横須賀の人って親切だな、と帰った時に伝えてもらいたい。それは誰がやるのかと言ったら、市民の人一人一人がやるしかないでしょ。一部の人をやっても対して効果ないでしょう。最後に、よその街に自分たちが行った時に「横須賀です」と胸張って言えるような街にしていくためにも皆で考えていく必要があるということをお話させていただきました。

○神谷氏 大変横須賀愛の強いコメントでしたね。前半でも井上さんが言ったように、まずやってみないと始まらないし、やろうと思わないとその気にもならないしということで、最初にコメントいただいた国吉さんもそうだけど、非常に奇抜な方がいて、自腹を切って太っ腹でやったという話ではなくて、それ面白そうだからやってみようよと言ってくれる人が誰かいないと始まらない。そういう大仕掛けである話は、丁寧に仕込んでいかないとできないと話だと思うけど、もっと気楽にやれることもあるだろうと。時間が無くて紹介できなかったかもしれませんが、ザルツブルクにはオペラの他にもう一つ楽しみがあると思う。オペラが終わるのは、だいたい夜の 11 時、12 時頃。それから朝方までどこかで語って、飲んで楽しめる。そのようなことがベースとして街にないと総合的に成功できたとは言えない。そうなるの一つ一つ街を楽しくしていく

ことが大切なことになると思っています。その一つのきっかけとしてまちづくりガイドラインがあるし、座長として上田さんも強い思いがあるので、これから運用が始まり、良いように変わっていくと思います。

さて、ここからは会場からコメントをいただいております。いっぱいいただいて、全部整理してお返しするような形にしたいと思いますが、いくつか紹介したいと思います。

横須賀の資源として、米軍だとか自衛隊、港、軍港を指摘されている人が多いです。観光を楽しめる軍港の街だとか米軍基地との交流イベント、米軍基地を容認するわけではないが街のPRに活用したいなど色々あります。

もう一つは、我々としても心しておかなければいけないと思っていることがあります。もう遅いと思うけど店の跡継ぎが見つけれないという意見もあります。あと、これは女性だと思いますが横須賀中央はお爺さん好みのまち。親子で来たいと思える要素が全くない。海や自然の緑はあるが、全く活用されておらず、子どもと来ても遊ぶ場所ない。三笠公園は子どもの足では遠すぎる。ベビーカーで歩きづらい道が多い。Yデッキから降りづらい。おむつを替えるところもない。モアーズで済んでしまうので、街には何も期待はない。期待は持てない。といった厳しい指摘がありますが、そういうことをなんとか解消しようということで、これからまちづくりをしていこうとしているところですが、いただいた意見以外にもこれまで出た意見も踏まえた上で、別の意見がある方、自分の意見の思いを伝えたい方、もしくはパネラーに対する質問がある方などご発言いただきたいと思いますので、挙手をお願いします。

○質問者A氏 上田さんのアイデアを聞いて、ザルツブルグの音楽祭をやることは良いなと思いました。S

NSを活用して世界中からどのような反響が来るのか知りたいし、クラウドファンディングでお金が貯まったらやってみることもできると思いますが、どうでしょうか。

○上田氏 ありがとうございます。これからの時代に合った形で、広報の仕方もある必要だと感じているし、財源の問題も含めて、あなたみたいな意見をいっぱい出してもらい、やっていく必要があると思う。そして、私の提案だけが良いということではなく、これも良いなと感じてほしい。例えば他の人の提案であるマーケットの問題も含めて、複合して、連動して動いていくことで街が活性化され、人が集まってくるものだと思います。一つだけやっても駄目だと思うのです。先ほど、神谷先生からもお話があったが、オペラが終わった後に食事するところ、酒飲むところがない。という話があったが本来コンサートだけのことを言えば、演奏が終わったらそれで終わりということではなく、当然その後にドレスアップしながら次の会場、次の食事なりお酒を飲みながら前の演奏の話を語り合いながら、そこまで楽しんでコンサートは終わりだと思う。そういう意味では、まちづくり全体を考えてやっていかないと成功しないと思うし、それをやるとしたらリスクは確かに高い。よっぽどの覚悟が必要だと思う。だから、これをやるかどうかということではなく、今日はこういう提案もありますよという意味で発言しているので、ぜひそういうアイデアを皆さんで出していって、市民のみんなで作っていかねばいけないと考えている。別に私のアイデアでなくても良いと思っている。新しい色々なアイデアをぜひ出してもらうことが大切だと思います。これは、やろうと思って1年、2年でできることではないです。でも一歩前にならなくてはいつまで経っても一緒だろうし、皆で本気になって考えた事であれば、不可能なこともできるようになっ

てくる。それがみんなの力だと思います。

○神谷氏 井上さんは、クラウドファンディングを活用したことやこんなことをやってみたらどうかといった提案はありますか。

○井上氏 クラウドファンディングは、私もやったことがあります。野菜のプランターを大学の裏の根津という街で商店街や店先に緑を置いて、野菜を育て、収穫し地域の子どもたちとおでんを作って食べるみたいなことをやってみました。しかし、クラウドファンディングというのは目標額を決め、目標額が集まったので一度立ち上げはしてみたが、毎年となるとなかなか難しいと言うのが現状です。

○神谷氏 国吉さんは今のテーマでコメントいただけますか。

○国吉氏 横浜でもいくつもやっていて、私も寄付したことがあるが、井上さんが言っていたように立ち上げはできるが継続することが難しい。それで、アーティストの方々が新しい形のスーパーマーケットを作るにあたって、クラウドファンディングを活用した事例もあり、継続できていることもある。初期投資だけを集めても効果がないため、運営方法も一緒に考える必要がある。それから、今日のお話の中で、井上さんの提案である公園に皆で集まって何かやることは可能だと思う。ですから、できることはまだまだ身近にあるように感じました。

○神谷氏 小山さん何かありますか。

○小山氏 まず、始めようというのをたくさんの方が思っていていかないと一部の人がずっとやるのは継続が難しいので、それが伝染していくようなことを考えながら、それぞれが一人一人に伝えていくとか、仲間を増やしていくことが、地道ですけど一番なのかなと思います。

○質問者A氏 とりあえずお金が集まったらやってみ

るだけでも良いのではないかと思います。それと旅行者の方のアイデアや観光旅行を多くしている人からアイデアを集められたら良いように感じています。

○上田氏 ありがとうございます。賛同していただく方が一人増えたので嬉しいです。今みたいにどんどん意見を出していただきたいです。

聞いていて、もう一つマルシェの話が出たので、お話しします。ニースのマルシェがありますが、これは市役所前公園程度の広さしかありません。ここでは、朝市をやっています。魚も肉も野菜も売っています。周りは、全部レストランになっています。昼間は空いている店もあるが、11時ぐらいになると全部中の市場が掃除を初めて、市場が無くなってしまいます。そうすると周りのお店が前に出てきて外のレストラン、喫茶店になるわけ。何が良いかと言うと市場は臭かったり汚かったりするの、毎日朝清掃して帰っていくからそこがレストランや喫茶店として使える。そういうことで、綺麗である。なおかつこの場所は、地下が駐車場であるわけ。市役所前公園も地下が駐車場ですよ。こういうところもうまく利用すれば、良いと思います。クラウドファンディングを取り入れていく、新しい形を取り入れていくことで、横須賀でも利用できることが皆さんのアイデアの中で出てくると思う。ぜひこれからも意見してほしい。

市民からのアイデアの窓口を行政が作って、できる、できないは別としてまずみんなで考えてみんなで意見を出し合うことが横須賀を皆で生かしていくためには、大事ではないかと思います。

○質問者A氏 例えばイベントとかで、美味しいイタリアンの食事を作ってくれるシェフを呼んで、ご飯が食べられるようなイベントがあると横須賀の食材を活かしていただき、美味しいエコノミーなものが食べられたら価値が上になるのかなと思いますが、いかがで

しょうか。

○神谷氏 私も食文化については、地元の食材の価値を高めることは大事だと思います。そのためには、例えば3つ星レストランのシェフが出てくることはインパクトがあると思う。私は、人口 7000 人程の真鶴に住んでいますが、数年前に三つ星レストランがでてくるという噂がありました。しかしそれはかないませんでした。7000 人の街に三つ星レストランができるということは、おそらくお客さんは真鶴の町民ではない。たぶん箱根や熱海、東京から来る人とかになるだろう。それはやっぱり、それだけ素材として優れていたということになると思います。横須賀でも条件が良いから、そういうことに適しているかもしれない。さっき井上さんが紹介したマルシェの話は、相当良いものだと考えています。それは、街のど真ん中のエリアに街の人たちが日常で楽しむ豊かな生活、それが三浦半島全土から素材が集まった時にそこが楽しい場所だったら、絶対東京から人が来るようになると思います。この街の目玉は何かと考えた時に、それができればガラッ変わらと思った。何かをやるにしても地元の人をそっこのけで、よそからの人が金儲けする話はどうもよくないと思います。だから、もっと自分たちがせっかくやるのだから楽しんで、これは井上さんが言ったように小さなことでも自分も楽しんでやるのが大切だし、そういうことを積み重ねてく。そのきっかけとしてこのガイドラインがなってくれば良いと思っております。

ほかにどなたかご意見有りますか。

○質問者B氏 私は、横須賀の港が丘に住んで 20 年ぐらいになります。私は、毎年東京の人を何人が連れて横須賀を案内する。軍港クルーズに行き、坂道を上って、ソフトフランスパンを食べて、横須賀中央の中央酒場で飲むという横須賀満喫ゴールデンコースと

というような形で紹介している。それで、横須賀に来てもらった方は、横須賀良いな、横須賀中央良いなど言ってくれる。特にビックリされるのが、横須賀中央のトンネルを抜けて、小さな駅のところに、横須賀中央という大きな街があるというのは降りてみなければわからないと言っています。次にまた来たいとも言ってくれます。横須賀中央って本当に街として良くわからないような街ですけど、そういうところを逆手にとってもっとPRしていけばいいと思いました。

あと、坂の話ですが、あの坂に名前が無いのが残念ではないかな。ぜひとも名前を付けたい。場所が特定できるような名前があると良いと思います。それと横須賀の人は坂の上の人ほど、来てほしくないと言う住民がいるため、そういうことを言っている住民がいる以上は、街も発展していかないのではないかと考えております。

○神谷氏 中央酒場という話が出ました。中央酒場付近の狭い通り、それから豊川稲荷の階段、若松マーケット、昔ながらの商店街、そういうところを良さと感じている方も多いようです。

他にだれかいませんか。

○質問者C氏 私は、上田さんの応援団と言うわけではないのですが、上田さんの話していた横須賀を観光だけの街ではなくて、何かを生み出すような街にしたいということだと思います。井上さんの話を聞いて、ハッキリ見えなかったと思うのが、人が集まって、一人だけの街になってしまうような印象を受けてしまった。なので、消費するだけではなく何か生産したり、そういうものを生み出すような街になればいいなと思いました。

○神谷氏 井上さん、消費ではなくてクリエイティブな街であるということの補足はありますか。

○井上氏 補足と言いますか、そもそも中心市街地と

言うのは、中心市街地としての役割があると思っていて、それはどういう人に来てほしいというマーケティング的な発想も大事ですが、それ以上にその街に住んでいる人、横須賀市の中心であれば、横須賀市民の誰もがこの場所にきた時に、何か自分にとって意味のある活動ができているということが大事だと思っていて、そういう意味で先ほどもマルシェの話がありましたが、生活に根付いた活動というのがあると思う。そういう市民の人にとって意味のある、誇りに思える場所が中心にあること自体が、観光と言う意味でもよそから来る人もそういう所を見に来ると思います。観光地、観光地している場所を周る流れは段々と無くなっていて、それはザルツブルグもそうだと思いますが、そういうものがある街で人がどう生活していくか、そこがどう伝わっていくかポイントだと思っています。そういう意味では、消費をするだけだと意味がないということはそのとおりだと思います。それが生産的であると私は思っていて、街の美味しいものが全部集まり、ここで皆で買い物して、話をして、家に帰って美味しいものを食べることは、すごく生産的な活動だと思う。という意味で、様々な活動が誰にとっても中心市街地にある。そういう存在に横須賀中央がなってほしいと言うのが私の考えであり、思いです。

○上田氏 今の話で、「住んでいる人たち」という話では、観光だけの話ではなく、並行してやっていかなくてはいけないことがあります。それは住んでいる人たちをもっと増やすために何かできないかと考えた時に、横浜と比べて子育て、それから色々な意味で、住んで良い街というのはどういうことなのだろうか。昔だったら、空気良いね、あつたかいね、台風こないよね、だからいい街だよ、と感情的な雰囲気生まれ育ってきましたが、もっと捉える必要がある。よその市民になってしまう人が多い。何故ならば、横浜と比

べて子どもたちの学費補助の問題、育児問題、病院の問題など様々なことを調べて決めることが多いからだと思います。なおかつ横須賀には産業も少ない。これもこれから変えていかなければいけない。これは、景観の問題ではないかもしれないが、横須賀の街づくりの中でマルシェに来る人たちが、やはり地元の人たちが、まず来てくれて、よそからも来てくれる。そういういくつもの重なったことを色々並行してみんなでやる必要がある。我々もやらなければいけないと思うが、行政の力が必要になってくると思う。しかし、行政を動かすのは市民だと思っている。皆さんが本気でもっと熱い気持ちを出せば動くと思う。だから、皆がそういう気持ちで変えていく必要がある。やらなければもっとひどいことになると思うので、横須賀もぜひ一緒にやっていただければと思います。

○神谷氏 一つだけ紹介したいことがあります。どういう街を期待しているかという質問に対して、フォトジェニックの街と書いてくれた方がいます。もし、会場内にいらっしゃいましたら、どのような街をイメージしているか教えてください。

○質問者D氏 私は、汐入5丁目に住んでいます。横須賀市の空き家の対策事業の一環として空き家の斡旋を受けて2年前に引っ越してきました。私の住んでいる家は、昭和30年代に建てられた築60年ほどの古民家だったので、とてもではないが引っ越してきた当初は住める状況ではなかった。そこを2年かけて自力で直し、非常に素晴らしい建物だったので、元の状態に復元するような形で工事を進めていきました。床をあけたら囲炉裏が出てきて、建てつけの家具とかそのまま残っている状態、ただ手入れがされていない状態でした。それをうまく活用して、もうじきそのスペースを浦賀道に面しているの、その自宅の一部を開放しようと考えています。浦賀道に面しているその家をバ

ックにすると非常にフォトジェニックな感じがします。自宅の居間にいると目の前にロナルドレーガンが横付けされるような感じに見え、それも非常にフォトジェニックな景色です。空母は12隻あり、一生空母を見ないで過ごす人がほとんどである中で、私たちは毎日見れるような場所なので、そういうところをPRした方が良いのではないかと書かせていただきました。

○神谷氏 ありがとうございます。あまり時間がないため、小山さんから順に1分程度ずつお話いただきたいと思います。

○小山氏 紹介事例にもあった中で、皆さんの話にも共通することですが、自分たちが何かしよう、試してみようということが印象的でした。何かやってみようと思った時に気軽に始められるお試しビルのような物が日本中にあるようなので、それが観光でも良いと思うので、来てみて良いなと思えば住んでみようとか、農家に留学する取り組みもあるようですから、そういうものをどんどん利用して、最新のSNSなどを駆使して、皆でやっていきたいと私自身も思っているので、今日会場に来てくれた人たちは、またそれぞれが伝えていただいて、また何かやってみようということができれば良いと思います。ですので、交流を深めるとかソフトな面をやっていかれたらと思います。

○井上氏 今日はありがとうございました。何かをやる時には楽しくやらなければいけないというのがありまして、嫌々やる活動は絶対うまいかない。大学の外で色々な活動をやっている実感したのですが、同じようなことを楽しめる人や違うことで楽しんでいるけど何か街を良くすることに結局繋がるのかなとか、ちょっとずつ共感できる場を作ることが大事かなと思います。まず、その場を作ること、アイデアを実践に移すことでもそれぞれの立場で、自分は何ができるかと言う視点で考えた方が良くと思いました。私も自分が住

んでいるところも含めて、色々なところでやりたいなと思いました。ありがとうございました。

○国吉氏 横須賀は色々な環境資源を持っています。持っている資源が横浜や鎌倉とも違う独自のものである。そういうことを含めて発信していくことが横須賀の宣伝になると思います。その中心となる街としての作り方をイメージするべきだと思いました。

○上田氏 横須賀の街を中央エリアで考えた時は、ということで、今日来ていただいた方もそんなこともあるなと考えていただける必要があります。横須賀は、民泊がすごく進んでいます。先ほど井上さんから話がありました、やるのであれば楽しくやらないとダメだと思う。しょうがないから、行かなければいけないから会議に行っているのだというのは続かないと思う。実は民泊をやっている方から、毎日のようにフェイスブックが届きます。今日は、こんな人たちが来た。今日は外国から来たのだと。あれは、嫌々やっていないと思う。やっていて楽しいのだと思う。その気持ちを持てる事業を我々もやっていかなくはいけないと思うし、そういう意味では、今日の機会をきっかけになってくれれば良いと思いました。

○神谷氏 時間になりましたので、これでこの回を締めたいと思います。本来、コーディネーターとしてきちんとした取りまとめをしなければいけないのですが、今回は4人に振ってまとめとさせて頂きたいと思いません。今日はありがとうございました。

よこすか都市景観協議会

【会員】9団体

- 一般社団法人 神奈川県建築士会横須賀支部
- 一般社団法人 神奈川県建築士事務所協会横須賀支部
- ミーズ設計連合協同組合
- 公益社団法人 神奈川県宅地建物取引業協会横須賀三浦支部
- 公益社団法人 全日本不動産協会神奈川県本部横須賀支部
- 横須賀建設業関連団体協議会
 - ・一般社団法人 横須賀建設業協会
 - ・横須賀建工同志会協同組合
 - ・一般社団法人 横須賀三浦建設協会
 - ・横須賀電気工事協同組合
 - ・横須賀管工事協同組合
 - ・横須賀緑化造園協同組合
 - ・横須賀三浦塗装工業協同組合
 - ・横須賀内装事業協同組合
 - ・測新会
- 公益社団法人 横須賀青年会議所
- 横須賀商工会議所
- 横須賀市

【オブザーバー会員】3団体

- 神奈川県横須賀土木事務所
- 東京ガス株式会社横浜支店
- 東京電力パワーグリッド株式会社藤沢支社

[順不同]

<事務局>横須賀市都市部まちなみ景観課

〒238-8550 横須賀市小川町 11番地

TEL:046-822-8377 FAX:046-826-0420